スクールバス

11月1日（水）から大沢小学校で試験的に導入されたスクールバス。2台の貸し切りバスが、4つの路線を運行しています。バスには学校の先生が同乗し、降車地点に保護者が出迎えに来ていることを確認して児童を降ろします。出迎えがない場合には、安全のため児童を学校まで連れ帰ります。料金は1回100円。来年3月23日までの試行期間にスクールバスを必要とする児童の数や、料金設定の妥当性、保護者や教職員の負担のバランスなどを検証していきます。

スクールバス

11月1日、大沢小学校にスクールバスが試行的に導入されました。「完全付き添いを続けていくのは、現実的に困難です。付き添いの負担軽減という点でスクールバスの試行導入は画期的なこと、大英断です。利用した子どもたちは、遠足みたいでとても喜んでいました」と笑顔で話してくれた粉川さん。しかし、課題もあるといいます。「次年度以降、今の形を継続するのは難しいですよね。市内の子どもたち全員に対して公平にやらなくちゃいけない市の立場とか、財政的な問題もありますから。利用者も初めの予定より減りました。登校班を維持するために乗るのをやめた子もいますし、結局、バス停までは迎えに行かなくちゃいけないんで、だったら学校まで迎えにいくという人もいます。利用者にとっては金銭的な負担（一人当たり月に約2千円）もありますしね。それに、学校の先生も大変ですよ。下校のバリエーションが増えましたから。でも、スクールバスは付き添いの負担軽減という点でとてもありがたいものです。利用者のニーズを把握したり、路線バスを併用したりしてコストを下げる方法を考えながら、検証していきたいと思っています」。

次のステップ

「子どもたちのことを考えると、親が直接付き添うことで、自由な時間を奪ってしまいます。それよりも一歩下がって、見守るほうが自然ですよね。いつかは完全付き添いを緩めて、見守りやパトロールに切り替える時が来ると思います」。現在の取り組みは、非常事態だいう粉川さん。「今の状態を永久に続けていくことは不可能です。安全を確保した上で、負担を軽減していかなくちゃいけないと感じています。パトロールと見守りを中心にして、地域の大人が子どもに目を向けるようにすれば、負担も減りますし、続けていけるんじゃないかと。親が自分の子どもを守ることは当然のことですし、やらなくてはならないことです。でも、継続していくには、あまり力まず続けていける形が必要です」。

心配なのはスクールバス試行が終わった後と粉川さんはいいます。「完全付き添いには戻せないでしょう。もしかしたら、それが、見守りに移るタイミングかもしれませんが、慎重に対応しなければいけないと思っています」。

意識の共有、安全なまちづくり

「全市的にみれば、地域ごとに取り組み方が違うことは仕方がないことだと思います。それぞれ、置かれている環境が違うわけですし。地域の実情に合わせて、付き添いだったり、見守りだったりの活動をしていけばいいと。ひまわり隊とまったく同じことをする必要はないと思います。ただ、誰もが縁遠いことだと思っていても、いつ当事者